

薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ…



2021年
5月15日
第115号

シナマオウ（マオウ科）

園では第一と第二圃場に植栽されています。中国原産の草本状の小低木で、雌雄異株です。今、緑色の雌花が咲いています。秋に肥厚化した苞が赤い液果状になり、黒い種子を包んだ赤い果実（偽果）となります。雄花は葉腋または茎頂に球形で黄色く咲きます。茎の形はトクサ（木賊）によく似ており、緑色を帯びた地上茎が生薬のマオウ（麻黄）となり、エフェドリンを含み、辛温解表薬として、葛根湯、防風通聖散、麻黄湯、小青竜湯などに配合されます。シナマオウはおもにモンゴルなど乾燥した地域に分布し、乾燥を防ぐために葉を鱗片状に変化させ、葉からの水分の蒸散を抑制しています。そして茎が葉に代わって光合成を行うようになりました。シナマオウと同じように、葉の代わりに他の器官が光合成を行っている植物は意外に多く、砂漠に生育してるサボテンなどは、葉を退化または刺状に変化させ茎が光合成を行っているのはよく知られていますね。

カノコソウ（オミナエシ科）

第二圃場で茎の先に淡紅色の花をたくさん付けているが見られます。湿った草原に生える多年草ですが、ほとんど野生のものは見られなくなりました。蕾が赤く、花がピンク色でちょうど鹿の子模様にみえることから鹿子草の名がついたようです。根が生薬のカノコソウとなり（従って「カノコソウ」は植物名と生薬名の両方を指す）、その漢名が吉草根（キツソウコン）です。もともとはヨーロッパでの民間薬、セイヨウカノコソウの根（生薬名：ワレリアナ根）が江戸時代に日本へ入ってきたときに、その代用品として開発されました。ワレリアナ根と生薬のカノコソウは、香りは全く異なるのですが、どちらも精神不安やヒステリーの治療に用いられます。筆者が以前、仕事でカノコソウを扱っていた頃、あまりの強烈な臭いにうんざりしましたが、まだ精神状態が安定している事に安心した覚えがあります。